

教師が20代までに身につけておきたいスタートアップスキル

なんで

学級経営が

うまくいかないのか

を解決する法則

マンガで
読める!

実践編

さらに読みたい46の法則

著／向山洋一・前田康裕 解説／TOSS広島コンマサークル



目次

第1章

いじめに直面したときに役立つスキル

■ 向山洋一 いじめ対応システム	8
1 なくせるのは教師だけ	9
2 子ども集団は力になる	13
3 ひとりぼっちを見逃さない	17
4 その瞬間に解決する	21
5 教師だけが解決できる	25
6 「差別」を見逃さない	29
7 席がえの時のひやかし	33
8 「詰め」をしっかりと	37
9 いじめは「闘い」だ	41
10 私のいじめへの対応	45
11 貴重な学習の場にする	49
12 ある母親の訴え その1	53
13 ある母親の訴え その2	57
14 ある母親の訴え その3	61
15 ある母親の訴え その4	65
16 ある母親の訴え その5	69

17 ある母親の訴え その6	73
18 ある母親の訴え その7	77
19 責任は教師にある	81
20 中学での「いじめ」	85
21 ×いじめ ○傷害事件	89
22 まじめだけでは駄目	93
23 解決には方法が必要	97
24 闘いは4月から始まる	101
25 システムをつくる	105

第2章

もっと授業がうまくなるためのスキル

■ 黒帯六条件	110
1 たった1つの方法が…	111
2 やってみると全然違う	115
3 やり方の違いを見つける	119
4 実践によって見えてくる	123
5 困難な方を選ぶ	127
6 プロ教師への唯一の道	131

7	本音を言える研究会	135
8	すごい力をつける方法	139
9	応募できる論文を書く	143
10	なぜ100本なのか？	147
11	時代の最先端を学ぶ	151
12	成功者は年俸の5%使う	155
13	黒帯六条件ステップ10	159

第3章

「仕事に慣れた」と思ったときにこそ、 知らなければならないスキル

■	授業の原則（技能編）八カ条	164
1	学ぶ教師だけが立てる	165
2	小指の動きにも敏感に	169
3	目線の落ち着き	173
4	とんでもない意見を大切に	177
5	教師が自分でやってみる	181
6	短く話を決める	185
7	学ぶ教師だけが向上する	189
8	謙虚さを失わない	193

TOSS用語解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201

刊行によせて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205



文中に出てくる TOSS とは教師による研究団体です。

授業にすぐに役立つ教育技術・指導法を開発し、集め、実践し、検討しあって自らの授業技術を高め、そのような技術や方法を全国の教師の共有財産にしようと努める教師の研究団体です。会員は1万人を超える、日本最大の教育研究団体です。

著者の向山洋一氏は TOSS の代表です。

そのため、文中には TOSS で使われている専門用語が出てきます。

文中、右下に▲がついている語句は、そういった「TOSS用語」や、向山氏に関連する人物名などです。P197からの「TOSS用語解説」に説明が掲載されています。

この本は1998年に明治図書から刊行された『教師の仕事365日の法則』に新しい原稿を加えて再構成したものです。

編集部

第1章

いじめに直面したときに 役立つスキル



向山洋一 いじめ対応システム

発見 1、触診（観察）

2、問診（アンケート）

3、検査（調査）

対処 1、いじめの訴えに、

即対応

2、校長を含めた会議

24時間内

3、担任の訪問

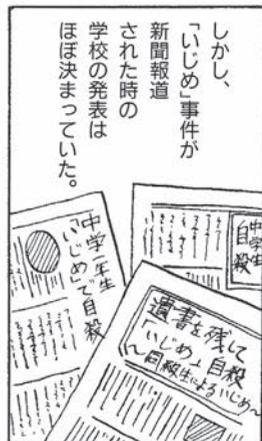
追跡

1、解決の報告

2、校長のフォロー

1 なくせるのは 教師だけ

本当のことは見て
本当のことを語る



1 なくせるのは教師だけ

本当のことを見て本当のことを語る

十数年昔、教え子の大河原香さんは、向山学級を卒業して、中学校から聖心女子学院に入った。

中学2年の時、中学生文学大賞で日本1位に輝いた。

題は「向山洋一先生」である。選者は岩崎京子氏をはじめ、第一線の児童文学関係の方々だから、半端なものじゃない。その作文の末尾は、卒業の時の別れの言葉で結ばれている。

卒業して、向山先生とお別れするのは、とても悲しかった。最後の学級通信に書かれた先生の言葉が、先生の私たちを思う心を良くあらわしていると思う。

『やがてこの子たちは、新しい出立の時をむかえる。そしてさらにその向こうに、自己の生きてきた証しを刻みつけていく。願わくば、その刻みが、より鮮明であり、より深いものであることを願いたい。ぼくを超えるほどの価値のある仕事をする人間に、そうなることを心から願いながら、その出立を見送る。

そうなった時に、はじめてぼくとの関係は淡いものとして、過去のものとして、思い出されるようになる。現在の人生が激しいものであれば、過去のことなどを思い出す必要はないしそのひまもない。ぼくを超えるほどの価値のある仕事をするようになったら、ぼくとのことは思い出す必要もなく、さらに高いものへ挑戦していけばよい。そうなることを切に願う。ぼくとぼくとのことが過去のものとなるよう



な、そんな豊かな人生であってほしい。

まさしくこれが教師と教え子とのさだめであり、だからこそ教師であるぼくはいつも淋しい。』

ほんとうに向山先生に会えて良かった。向山先生のクラスで2年間過ごすことができて幸せだったと思う。

さて、私は『学級を組織する法則』（学芸みらい社）の最後に、若き読者のために「3つの問い」を出している。

例えば、次の通りである。

跳び箱が跳べない子の指導について、昔から研究がされてきた。しかし、指導法が確立されなかった。なぜ、向山は跳び箱の跳ばせ方を法則化できたのか。

答えは次の通りである。

私は事実のみを見ようとした。私はわずかな事実の変化も追及した。何よりも私は、本気で子どもをできるようにさせたかった。そして私は見栄を取り繕うとしなかった。

今、彼女は河野太郎代議士夫人である。

1

わずかな事実の変化も 追及する

本屋さんの中で誓った
「いじめは教師だけがなくせる」

笠井 美香

解説

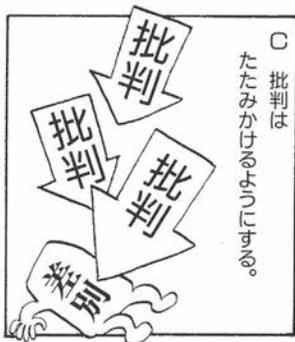
——現在の視点から

長男を産んだ時、テレビをつければ、「いじめ」によって生命を絶った子どものニュースが流れていた。残酷なシーンも次々流れた。「教師が悪い」「学校が悪い」とががが怒っている解説者もいた。私は、生まれたばかりの長男が「学校の中でいじめられたらどうしよう」「かわいそうに。学校へ行かせたくない」とテレビをつけるたびに思った。長男が泣くのと一緒に、私も泣きながら「いじめられませんように」と廊下を歩いた。

異様な私を心配して、父は本屋さん連れ出してくれた。私は、そこで見つけた一冊の本『いじめの構造を破壊せよ』（明治図書）に書いてあった一文に号泣した。「いじめは教師だけがなくせる」。その一文が「泣いてなんかいられない。私が、いじめをなくす教師になるのだ！」と決意させた。育休明けの私は、クラスの子どもの顔、動きをよく見た。笑顔が見えると安心した。いじめをなくすには、わずかな子どもの変化を見逃してはいけない。いじめられている子どものちょっとした変化を見逃してはならないと心に課している。

2 子ども集団は力になる

いじめは闘いである
知恵と力が
教師には必要だ



クラスの一かひとりが立って男の子の批判をします。これはこたえます。その子は反省らしき言葉を述べるはずで。教師は「子ども集団には教育力がある」という原理を使いこなさなくてはならないのです。



そして一人一人に「女の子を殴ったことをどう思いますか」と聞きます。

2

子ども集団は力になる

いじめは闘いである 知恵と力が教師には必要だ

私の著書に『いじめの構造を破壊せよ』(明治図書)がある。現在は絶版となり、学芸みらい社から『いじめの構造を破壊する法則』が出版されている。

私としては、かなり自信のあった本である。

「いじめ」にどのように対処していくのかという具体的指針がはっきりしている本である。

反響は「マスコミ」界からが多い。

昨今「いじめ」が大問題となった。テレビで特集するし、新聞も連載を組んでいる。

阪神大震災が起きて、どこかへ飛んだ感じがするが、いずれまた取り上げられるだろう。

記者やディレクターも勉強を始めた。

とりあえず大きな本屋に行って「いじめ」関係の本をどっさり買い込んでくる。

「いじめ」関係の本の中で、「向山のものが面白い」「会ってみよう」「取材してみよう」ということになっているらしい。

何より「どのように解決するのか」という具体的展望がはっきりしているのが良いらしい。

記者もディレクターも「涙」だけの取材には、うんざりしているのだ。

「ではどうするのだ」「どうしたらいいのだ」こうしたテーマとなる。



いじめの取材に来られた「東京新聞・中日新聞」の記者は、すごく興味を示され、取材後に、長い手紙を寄こされた。

「向山先生の本がもっと読まれ、いじめが解決されるといい」と言われたプロデューサーもいる。

『いじめの構造を破壊せよ』を読んで、私は教師になって初めて「いじめを解決することができました」という便りも多くいただいた。

「いじめ」には、教師であればあるほど悩む。

いじめは闘いである。そのことをまずしっかりふまえてなければならない。

闘いには、知恵が必要だ。我流でやってはいけない。考えもなしにカッとただけでやってはいけない。

すぐに、直ちに対処しなければならないが、知恵と力が必要だ。

力とは腕力のことではない。子ども集団だ。子ども集団が力なのである。

「子ども集団」という力を味方につけ「いじめ」と対決しなくてはならない。

このことの自覚がまず必要である。

2

子ども集団には教育力がある

「子ども」は「子ども」に
認められたがっている

笠井 美香

解説

——現在の視点から

「いじめは闘いである」

1人でやんちゃくんと対応すると、必ず痛い目にあった。『いじめの構造を破壊せよ』（明治図書）の本に出会う前は、いつも躍起になって、授業を妨害しようとするやんちゃくんに1人で挑んだ。私の言葉のあいまいな部分をとって、やんちゃくんは迫ってくる。それに私もいちいち反応し、どんどん怒りのヴォルテージが上がった。『いじめの構造を破壊せよ』に出会い、私は「子ども集団」という力を味方につけることを知った。「いじめの闘い方」を知った。

いじめをした子どもを前に立たせたこともあるが、悪いことばかりしていたやんちゃくんが素直になりつつあるとき、やんちゃくんに前に立たせて、「いいこと」を次々言ってもらったことがある。クラスの子どもたちが次々に立って、やんちゃくんの良いところを言っていた。「やさしいです」「イケメンです」「いつもぼくを笑わせてくれます」。34人分のほめ言葉をもらった時から、やんちゃくんは本当に変わった。